

日本社会にとっての高校野球・甲子園大会の存在意義

～部活動の全国大会という視点から～

The meaning of presence of high school baseball and 'Koushien' for Japanese society

~through the viewpoint of the national game of club activities~

1K06B221

指導教員 主査 石井昌幸先生

百瀬 貴彦

副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

20 世紀から 21 世紀にかけて日本人はいくつもの変化に直面してきた。それにより日本人の生活レベル、価値観なども以前とは違ったものになってきた。多くの変化がみられる中で甲子園野球は約一世紀にわたって行われ続け文化・教育・ビジネスといった人間の精神活動のあらゆる側面を持つ。より多くの日本人が高校野球の本質的存在意義を理解し一層理想に近い形の甲子園野球・高校野球が創られていくことは日本人に何らかの恩恵をもたらすとの考えのもと高校野球・甲子園野球の本質的な存在意義は何なのかを明らかにしていく。

【第 1 章】

甲子園野球の精神性は武士道精神の下、非常に厳しい練習を積んでいた一高野球部とクリスチャンで平和主義を信条とする安部磯雄に率いられ一高野球精神に対抗する形で力をつけていった早稲田大学野球部に由来する。又甲子園野球というイベントは鉄道会社による人々へのレジャーの提供という形で発展してきたとも言える。現在では高校野球は「野球による人間教育」を学生野球の意義とする日本学生野球協会の管理の下、行われている。

【第 2 章】

部活動という視点から見たとき高校野球の目的は生徒の教育である。しかし現状だと日本では多くの場合生徒の活動範囲は限定されている。

今後の学校教育、部活動の課題はアメリカのハイスクールスポーツのように日頃から生徒に開かれた環境を与えていくことである。

【第 3 章】

大正 4 年に全国中等学校優勝野球大会として誕生した甲子園野球は長年にわたって、メディアが「仲間のためにがんばる」「最後まであきらめない心」などのキーワードを提示し続けているある種ドラマとも言える存在である。またこれらのキーワードを軸に高校野球を盛り上げていくことは野球少年たちの成長を考えると非常に意義がある。

【第 4 章】

日本学生野球憲章は高校生に「若者らしさ」「ひたむきさ」等を要求して過去、多くの学校・部員が近憲章に違反した行為をしたとして処罰を科せられてきた。しかしスポーツの世界での新時代の到来に対応して日本学生野球協会では 2010 年 4 月施行を目標に憲章の全面改正を進めている。改正案の基底には「学生野球とはあくまでも教育の一環である。」という考えがある。

【第 5 章】

「球児を社会全体の発展に役立つ人間」へと成長させることが高校野球の存在意義の最たるものである。しかし現状では野球にのみこみすぎるあまり進路の幅を狭めてしまっている球児がいることを忘れてはならない。これには甲

子園野球やプロ野球選手がメディアによって夢の存在へと作り上げられているという背景がある。メディア側の人間や球児の指導に当たる人間はこの背景をよく理解した上で「生徒の将来の人生の幅を狭めない」という観点を以て指導に当たるべきである。

【第6章】

高校野球・甲子園野球の本質的存在意義は「球児の成長」である。現代の成熟社会といわれる日本社会は競争を基に発展してきた。今後の発展にはそれに加えて共存・共生の概念が必要である。これらの概念は21世紀の世界のキーワードであり日本人はその中心を担っていく必要がある。高校野球・甲子園野球を経験した人間の多くがそのような存在になっていくための高校野球の課題は「風通しの良い体制の確立」と指導者が「高校生の自治能力の育成」という視点をもつことである。